

『カヌー・ラジオ』

伊地知克介

登場人物

2014年、日本（トコハ市中央図書館）

手塚 図書館副館長

目黒 司書主任（男性）

足立 新任司書

館長

メイ 目黒と親しくなるラオス人女性

耳塚 CDショップの店長（男性）

首藤 ビブリオバトルチームのリーダー

毛利 ビブリオバトルチームのサブリーダー

傘男 足立の元夫

ちよう 毛利の義母

2114年（宇宙船グランドマザーシップ号）

ヒジカタ 船長

ハナダ 航海士

レディー ロボット

ユリア 乗組員

声 宇宙飛行士以外の全員で演じる

1970年代 (ラオス)

本運びさん

子どもたち

「本運びさん」「子どもたち」は全員で手分けして演じる。

2117年 未来図書館

ロボット合唱団 演じられる全員で演じる。

舞台は2014年のトコハ市中央図書館と2114年の宇宙船「グランドマザーシップ」号を行き来する。

図書館1階には、いすが並べられ、さまざまなぬいぐるみが上で「本を読んでいる」姿勢をとっている。2階は会議室。いすが置かれている。

プロローグ、エピローグと、宇宙船の内部は特に装置を置かない想定。

プロローグ・図書館の外

メイと目黒が図書館を外から眺めている。月の夜、静かな川辺。

メイ 私は図書館がとても好きです。なぜ日本の子供たちが図書館に行かずに、テレビゲームで遊ぶのか分からない。図書館は美しい場所です。たくさんドアがありますね。（手に持った本をドアのように開いたり閉じたりしながら話す）世界中いろいろな国へのドア、美術や音楽へのドア、歴史へのドア、ホグワーツ魔法学校に行けるドアまである。とても楽しい場所だ。そう思わないですか。

目黒 中で働いてると、楽しくないことも多いよ。

メイ 私は思う。もし子供のころ、近くに図書館があれば、どんなに幸せだっただろうか。

目黒 あなたの国には、図書館がないの。

メイ 私の育った村にはなかった。私の村、字を読む人が、とても少なかった。

目黒 じゃ子供のころのあなたは、どこで本を読んだの。

メイ 「本運びさん」が来るんです。

目黒 移動図書館車のこと？

メイ 日本語ではなんといいいますか。字を読める人が増えるように、子供たちに本を運んで、読ませてくれる外国の人たちのことを。

目黒 ああ、識字教育支援のボランティアのことだね。

メイ 私の村は深い森の奥にあって、自動車は入れません。「本運びさん」たちは川をさかのぼってくるんです。

カヌーで。

目黒 カヌー？

メイ これ（目の前の川を指差し）よりもっと大きな川です。森の木々の影が落ちて、もっと緑色で、暗くて、深い。そしてときどき、霧で覆われます。カヌーは霧の中をゆっくりゆっくり村に近づいてくる。へさきには、ラジカセが置いてあって、音楽が。

音楽。

メイ 霧の中から音楽が聞こえると、彼らが来ると分かる。村で聞くことのない音楽だから。村の子どもたちは一斉に走り出す。

子どもたち、一斉に走り出し、2人の左右に並ぶ。

メイ カヌーがつくと、私たちは

子どもたち いつもありがとうございます。本運びさん。

メイ 本運びさんはたいてい、若いヨーロッパの男性だった。いつもサングラスをかけていた。

「本運びさん」が登場する。

メイ カヌーを止め、ラジカセのスイッチを切る。積んできた本棚を広げ始める。

目黒 本棚を広げる。

メイ 本棚、木でできていない。カヌーにつめないから。カヌーに載せられるように布の本棚だ。

目黒 布の本棚？

メイ 大きな布にたくさんのポケットがついたものだ。その一つ一つに本が入っている。本運びさんはハンモックのように、本棚を二つの木につるす。

本運びさん、布の「本棚」を広げる。子どもたち、本を取り出して読む。

本は、外国の本に私の国の言葉をシールで張り付けたものでした。私たちは夢中になって読んだ。世界のいろいろな国の、神様や、魔女や、お姫様のお話。こんなに面白いものがあるなんて。（「本棚」から本を手に取り）その時間の私たちには本は本ではありませんでした。（本を鳥のようにばたかせる）翼でした。私たちを世界のいろいろな場所へ連れて行ってくれた。2時間ほどたつと「本運びさん」は、またラジカセのスイッチを入れる。音楽の中で、カヌーは川をくだっていく。霧の中に姿を消していく。みんなで言う。

子どもたち ありがとうございます。本運びさん。

「本運びさん」は右手を上げて応える。子どもたちは「本棚」をたたむ。

メイ 見送りながら、私は思っていた。

メイと目黒を残して全員退場。音楽小さくなる。

メイ いつかこの川をくだっていこう。本運びさんのあとを追って、川をくだっていけば、あの音楽のあとを追っていけば、そこには、本が信じられないほどたくさんあって、それをみんなが読んでいる、そういう国があるのだろう。そこには、私の知らない素晴らしい世界が広がっている。きっとそうだ。そこに行きたい。そこで暮らしたい。私は、川をくだっていこう。

目黒 それであなたは

メイ 私は、ここに来た。時間はかかったけど。本のたくさんある国に。

2人、ほほえみ合う。音楽が大きくなる。宇宙飛行士たちが登場し、目黒とメイは退場。

宇宙飛行士たちは歩きにくそうに宇宙船の操縦室に入り、操作し始める。レディ以外の2人は宇宙服である。

ヒジカタ 重力、よし。

ハナダ 酸素、よし

レディ 気圧、よし。

ヒジカタ 気温、よし。

ハナダ 湿度、よし。

レディ 生命維持環境、100%です。

ヒジカタ OK。

2人は宇宙服を脱ぐ。

ヒジカタ (携帯用通信機に向かって) スペースコロニー本部、スペースコロニー本部、こちらスペシャ

ルミッションチームナンバー1、グランドマザーシップ、コクピットに到着。応答せよ、こちらグ

ランドマザーシップのコクピットに到着した。

ハナダ 懐かしい。21世紀前半の宇宙船のコクピットだわ。今、動いているなんて信じられない。

ヒジカタ 動き出したから、カムバックしたんですよ。

ハナダ 今の宇宙飛行士では動かせないか。こんな時代の宇宙船を操縦したのは、あたしたちの世代が最後かな。

ヒジカタ (通信機に) 応答ありがとう。こちら、グランドマザーシップ。OK、今、到着した。2人と

も健康状態は良好。

ハナダ 私はちよつと頭痛が。

ヒジカタ ハナダが、仮病を。

ハナダ 宇宙に来たのは30年ぶり。頭痛くらいするわよ。

ヒジカタ 地球を救う仕事じゃなければ、私だって宇宙空間には来ないわ。

ハナダ 牧場経営が忙しいもんね。

ヒジカタ あんたこそ、不動産でもうけてるってうわさよ。

ハナダ (否定のしぐさ) 火星の土地って売れなくて。(通信機に) スペースコロニー本部、あたした

ちが老衰で死なないうちに、指示を出して。

ヒジカタ (指示を通信機で聞いて) 了解。コクピットの状態自体は良好。生存維持装置もすぐに10

0%になった。グラランドマザーシップの基本的な状態は現役時代と変わらないようね。操縦できる

かどうか、試してみるわね。

ハナダ はいはい、やりますよ (操縦桿をつかむ)

ヒジカタ 操縦開始。

ハナダ (試して) 操縦不能。レディ、手動操作に切り替えを。

レディ (試して) 手動操作、切り替え不能です。

ハナダ 第2操縦系を動かして、そちらを手動操作に。

レディ (試して) 第2操縦系、作動不能です。

ハナダ 思った通りだわ。

ヒジカタ メインコンピュータに何か起きてるのね。

ハナダ 完全に、勝手に動いている。

レディ こっちから信号を送っても、メインコンピュータが応えません。

ハナダ　なんでそんなことになるの。

ヒジカタ　老朽化よ。コンピュータの中に長年たまったバグが、こいつの中ですごくいいことになってるんだよ。

ハナダ　それで、勝手に地球に向けて動き出した。

レディ　お二人がおしゃべりをしている間に第3操縦系を試しました。

ヒジカタ　優秀なロボットだわ。どうだった。

レディ　作動不能です。

ハナダ　メインコンピュータにアクセスして、バグを取り除くには。

レディ　少なくとも1年。

ハナダ　そんなにかけられない。

ヒジカタ　仕方ない。レディ、爆破準備を。

レディ　爆破準備に入ります。

ハナダ　ちよっと待って。ライブラリーシステムを切り離せるか、やってみたいんだけど。

ヒジカタ　そんなの計画にないわ。

ハナダ　これまでこの宇宙船がどこをどう動き、誰を乗せ、どんなことにかかわったのか、すべて記録されてるの。人類の宇宙開発の歴史そのものよ。すごい貴重な資料だわ。爆破したら、それがゼロよ。

ヒジカタ　切り離しにはどのくらい時間がかかるかな。

ハナダ　レディ、どのくらいかかる。

レディ　計算します。

ハナダ　歴史は大事よ。

ヒジカタ 今生きている人類の生命財産の方が大事だわ。

レディ 計算できました。

ヒジカタ 優秀なロボットだ。

レディ 早くて22時間かと。

ヒジカタ そんなに待ってられない。

ハナダ 急げば地球突入までに間に合います。考えてみてください。

ヒジカタ 15時間以内に終わられる可能性は？

レディ 計算します。2%。

ヒジカタ リスクが大きすぎる。

ハナダ 人類の貴重な歴史を失ってもいいんですか？

ヒジカタ 危険はおかせない。

ハナダ アレクサンドリア。

ヒジカタ 何？

ハナダ 人類が初めての図書館を作った場所です。戦争で焼き払われた。

ヒジカタ あたしをアフリカの愚かな將軍と同じというのね。

ハナダ そういうわけではありません。思い出しただけです。船長、せめて12時間ください。ライブラ

リーシステムの切り離しの経験があります。爆破したら、ゼロですよ。ヒジカタ船長。

ヒジカタ (考えて) リスクが大きすぎるわ。切り離しはあきらめて。ライブラリーシステムごと、爆破して。

ハナダ 命令ですか。

ヒジカタ 私が船長ですから、私が判断します。

ハナダ 従います。

ヒジカタ レディー、自爆システムを作動して。

レディー 自爆システムを作動します。

ハナダ 脱出準備を。

爆発音。

ヒジカタ 何？

ハナダ 自爆システムは作動してません。

レディー 別のところで何かが爆発しました。

ハナダ どういうこと？

レディー 酸素低下、重力低下、温度低下、生命維持環境90%

ハナダ 何があったの。

ヒジカタ スペースコロニー本部、グラウンドマザーシップで小爆発。原因調査中。ミッション遂行可能か不明。

ハナダ 操縦機能、依然として回復せず。

レディー さらに酸素低下、重力低下、温度低下、生命維持環境75%

緊急警報が作動する。宇宙飛行士たち、懸命にあちこちのスイッチを操作して宇宙船の機能回復

を図る。

ハナダ あたしたち、死ぬの？

ヒジカタ スペースコロニー本部、脱出する。繰り返す。乗員の生命に危険があるため、グラントマザーシ
ップを脱出する。

宇宙飛行士たち、宇宙服をつかんで、飛び出していく。入れ違いに目黒と足立、毛利の義母が入
ってくる。

ちよう ごめんねえ。こんな時間にねえ。

目黒 いや、僕ら元々、きょうは夜の仕事があって残ってたから。

足立 お気になさらないください。

目黒 でも毛利さん、わざわざ中まで持ってこなくても表に本を入れるポストがあるんだよ。次からあ
れに入れてくれればいいからね。

ちよう 知ってるよ。私あれが苦手だね。

足立 苦手なんですか？

ちよう 本がね、痛っ、て言うのよ。

足立 「痛っ」ですか。

ちよう ごろごろっと下に落ちるでしょ。そこでね、「痛っ」て。

目黒 本が傷まないように下にはウレタン敷いてあるんですよ。大丈夫です。

ちよう　でも聞こえるんだよ。「痛つ」て。本はやっぱり手渡しでないかね。

足立　（本を見て）期限まだあるのに。

ちよう　いつお迎え来るかわかんないからね。返せるものはなるべく早く返さなくちや。

目黒　そんな縁起でもない。

足立　毛利さん、私車で送っていきましようか。

目黒　そうだ。最近、変なやつもこのへん出沒するからね。君送ってあげるといいよ。

ちよう　やめてやめて。仕事邪魔した上に、そんなことまでしてもらっちゃ申し訳ないよ。家、すぐだからね。帰る帰る。またね。

足立　そうですか。じゃ、気をつけて。また来て下さいね。

ちよう、去る。

足立　変なやつが出沒？

目黒　うん。

足立　本当ですか？

目黒　うん。変なの、本当に。でも人を襲ったりはしないからね。心配することはないよ。

足立　もしかして、体に変なものを巻き付けている60歳くらいの男じゃないですか。

目黒　いや。そんな話はないけど。そういうやつを見たの。

足立　いいえ。そういうわけじゃないんだけど。

目黒　大丈夫だよ。人を襲ったとか、そういう話は、本当にないんだから。

目黒はぬいぐるみの前に絵本を置き、広げて、写真を撮る作業を始める。足立はそれを見ながら話しかける。

足立 目黒さん、落ち着いてますよね。

目黒 そう、そう見える？

足立 どの。何があっても大丈夫、って感じ。

目黒 長いことやってるからね。

足立 よくそう言われませんか？

目黒 言われる。でもね、想定外のことの一つ起きるとね、すごくおろおろすることがあるんだ。

足立 見たい。

目黒 そのうち見られるかもよ。

足立 あっちの図書館にはあんまり経験豊かな司書がいなかったんです。

目黒 そうなんだ。

足立 若い人ばかりで。よく言われたんです。中央図書館は館長も目黒さんもベテランだし、目黒さん中心にいろいろ新しい試みをしているから、司書として働くのなら中央図書館の方が絶対いいです。今回、希望が聞いてもらえて、こっちで働けるようになって、すごくうれしいんです。

目黒 ここなんか、まだまだ。

足立 いろいろ教えてください。よろしくお願いします。

目黒 こっちこそ。もっと新しいことをしたいけど、人手不足で困ってたところなんだ。人手があれば

サラリーマン向けの深夜までの開館もできるし、ビジネス支援コーナーを設けることだってできる。まだまだやりたいことはいっぱいあるんだよ。でも人手がなくてね。

足立 なんでも言うってください。(ぬいぐるみを指差し) こういうイベントも、前の図書館では、ありませんでした。

目黒 「ぬいぐるみお泊りイベント」は、うちも今回初めてなんだ。アメリカの図書館が始めたらしいんだけどね。

足立 そうなんですか。

目黒 館長はやめとけって言っただよ。でも小さい子に絵本に親しんでもらう努力は、どんなにやってもやりすぎることはないと思うんだよ。

足立 小さい子供のぬいぐるみを図書館で一晩預かるんですね。

目黒 それで絵本を読んでいる写真をメールでそれぞれの家のパソコンとか親のスマホとかに送るんだ。簡単なイベントだろ。クマちゃんとかワンワン君が読んでた本を自分も読んでみようか、と坊やたちが思ってくれば、ま、大成功だよ。

手塚登場。手にシルクハットを持っている。

手塚 まあ、ぬいぐるみ集めたわね。

足立 副館長、おつかれさまです。

目黒 まだ帰らないんですか。

手塚 ちよっと、2階でビブリオバトルクラブとの打ち合わせがあつてね。

足立 ビブリオバトルクラブ？

目黒 知ってる？ビブリオバトル、本の紹介スピーチを5分ずつやって、一番読みたくなかった本をその場で投票して決めるんだ。

足立 知ってます。クラブがあるんですか？

手塚 メンバー3人だけだね。

足立 面白そう。

目黒 今度、交ぜてもらえばいい。

足立 いいんですか？

手塚 なかなか人が増えなくて。スタッフが入りたいって言ったら喜ぶよ。

目黒 それで、副館長、手品まで始めたんですか。

手塚 え？

目黒 副館長、本当になんでもできるよね。そっからハト出すんですよ？

手塚 あ、これ？違うのよ。

目黒 タップダンス？

手塚 (ちよつと踊って見せて) 違うつて。いたずらに使われてたの。

目黒 あ、日時計

手塚 けさはこれがかぶせてあったの。

足立 日時計？

手塚 図書館の前にあるでしょ。こういう (形を手で作り) 石でできたやつ。

目黒 最近いたずらされるんだよ。

手塚 風呂敷かぶせられるのよ、黒いバスタオルとか毛布も。

目黒 きょうはそれ？

手塚 対策を考えなくちゃ。

目黒 館長に日時計の横に立っておいてもらおうとか。見つけたら、怒ってもらおう。

手塚 いたずらやめるだけじゃなくて、図書館の半径10キロ圏内に近づかなくなるかもね。

足立 館長、そんなに怖いんですか。

目黒 普段はそうでもないんだけどね。

手塚 ニックネーム知ってる？

足立 館長にニックネームがあるんですか？

手塚 ミニラ。

足立 ミニラ？ゴジラの子供？

目黒 小さいけど、怒ったら、火をはくってことで。本人に言うなよ。火をはくぞ。

館長登場。

館長 何の話してるの。

手塚 館長。まだいたんですか。

館長 もう出かけるけどね。目黒さん、何の話をしていたの。何か聞こえたけど。怪獣の名前が。

目黒 いえ、あの、いえ（おろおろ）。

手塚 子ども向けの読書会の素材について話していました。目黒さんが、怪獣ものを特集したいと。円谷

系特撮もので。ゴジラとかキングギドラとか、ミニラとか。

館長
いけません。

目黒
いけませんか。

館長
同じ怪獣ものでも、もっと幅広く選んでください。「かいじゅうたちのいるところ」とか、「エルマーとりゅう」とか、いろいろあるでしょう。

目黒
はい。

館長
手塚さん。手品でもやるの。

手塚
違います。

館長
タップダンスでも。

手塚
(ちよつとダンスしてみせる) 何回やらせるんですか。

館長
何回もやらせてません。

手塚
これ、例のです。

館長
あ、日時計。

手塚
そうです。

館長
あなた、なんとかしなさい。なんでもできるんだから。

手塚
なんでもなんて。でも、次はつかまえます。

目黒
そんなこと副館長がしなくても、僕らがやりますよ。

館長
いいえ。やってもらおうわ。

手塚
やります。

目黒
僕らがやりますよ。

館長 私が館長ですから、私が判断します。（一同、黙る）そういえば、言うのを忘れていたわ。小説のモデルにしてくれて、ありがとう。

手塚 モデルではありません。あの、館長の責任感あふれる言い方があの、カッコいいな、と思って。同じような立場の宇宙船の船長の言葉に使わせていただきました。

館長 あら、そう。でも判断ミスをして、周りに迷惑をかけているんじゃないかしら。あなたの小説の船長さんは。

手塚 そんなことはないんです。

館長 後半ではどうなるの。宇宙人に食べられるの。

手塚 そんなことはありません。

館長 手塚さん、小説を書くなどと言いません。でも、私たちの仕事は本を管理することで、本を増やすことじゃないわ。小さな船に、多くのものを積み過ぎると、動かなくなるんじゃないかしらね。

手塚 はい。

館長、立ち去ろうとする。

手塚 館長。

館長 何？

手塚 大きな船です。

館長 何です？

手塚 私が動かそうとしているのは。大きな船なんです。たくさん物を積んで、とても操船しにくいけ

ど、でも、動かせると思うんです。動いたとき、たくさんの人を喜ばせることのできる、大きな船なんです。海に出る前に、動かすことをあきらめたくありません。

館長 もしそうであれば、あなたは、この小さな図書館の副館長に、すぐわない人なのかもしれないわね。

手塚 ここは好きです。

間

館長 運営委員会に行ってきます。車で行って、そのまま帰るわね。そうか、きょうはぬいぐるみパーティーだったわね。

目黒 ぬいぐるみお泊まりイベントです。

館長 失敗しないようにね。目黒さん。

目黒 分かっています。彼女にはもう帰ってもらってもいいですよ。私一人でも。

館長 あら、足立さんも見ていけばいいじゃない。これも経験だわ。彼が失敗しないか、よく見ていくことね。彼、思いつくことはいいんだけど、詰めが甘いのよ。で、失敗すると私とか手塚さんにすぐ助けを求める。

目黒 失敗なんか。

館長、退場。

足立 副館長、小説書くんですか。

目黒

S F。

足立

すごい。

目黒

同人誌、そっちにあるから、後で見せてあげるよ。

手塚

読まなくていいのよ。面白いつていう人全然ないから。館長は怒っちゃうし。

目黒

まだ前半だけだし。後半、面白くなるかも。

手塚

慰めになってない。

目黒

僕はまあ面白かったけど。宇宙飛行士が女性ばかりなのはいいと思うんだ。逆にリアルな感じがしますよ。

手塚

ありがとう。

目黒

でもあれですよ。世界を救おうっていうのに、老朽化して暴走する宇宙船に乗り込むのが日本人だけってのはどうかな。

手塚

あ、それうちの夫にも言われた。せめて乗組員1人増やして外国人出したらって。でも言葉の問題がね。

目黒

どうせ、本来は宇宙飛行士が話すのは英語でしょ。日本語で話している時点で、リアルじゃないんだから。いいんですよ、そこは自由で。

手塚

それもそうね。夫はアメリカ人か中国人出せばって。

目黒

それだと意外性ないな。

手塚

意外性いる？

目黒

メキシコ人出したらどうです。

足立

メキシコ人？

目黒 作品が明るい感じになりますよ。ソンブレロかぶって。どうすか。

手塚 宇宙船でソンブレロは変よ。

目黒 あと、ライブラリー・システム？あれを切り離すかどうかは、宇宙に出発する前に決めとくんじゃないですか。普通。

手塚 うーん、それもそうか。

目黒 でも、応援してますよ。きっと後半は、見違えるように面白くなるって。そういう小説あるじゃないですか。

手塚 だからそういう言い方じゃ、慰めにならないって。

足立 頑張ってください。

手塚 ありがと。ま、とりあえずいたずらものをつかまえるわ。通用門の方から入って、いたずらしてると思うのよ。あそこに監視カメラつけるかな。

目黒 大げさじゃないですか。図書館の本が破られたわけじゃないでしょ。風呂敷とかシルクハットですよ。

手塚 なんか考えるわ。あ、ビブリオバトルクラブの皆さんが来たら、会議室の鍵は開いてるから、自由に使うように言って。

手塚、去る。

目黒 いいよ、帰って。

足立 館長が見ていけて。

目黒 見ていったことにしといてあげるよ。

足立 いいですよ。別に用もないですから。

目黒 初日だし。家族とか待ってるんですよ。

足立 私一人暮らします。あの、離婚したので。

目黒 あ、ごめん。

足立 なんでそう早く帰らせたんですか。何かあるんですか。

目黒 分かった。お互い腹を割って話そうか。

足立 腹を割ってですか。いいですよ。

目黒 あるところに男がいた。ずっと独身で、図書館の仕事一筋で、ずっと独身できた。

足立 目黒さんのことですよね。

目黒 そうかもしれないし、そうでないかも。

足立 腹割ってないじゃないですか。

目黒 それでさ、50年目にして、結婚のチャンスが巡ってきた。つまり、運命の出会いがあった。

足立 ああ、いいですね。

目黒 そう。彼女は、東南アジアから日本に来て3年目で、日本のことを知ろうと、よく勉強している。
図書館の熱心な利用者だ。

足立 いいですね。

目黒 それで、一度、夜の図書館の様子を見たいと。

足立 今から来るわけですね。

目黒 協力してくれる？

足立 いいですよ。じゃ、その時は席を外しておきます。

目黒 いや、席を外さなくていい。そのへんにいてくれていいんだ。

足立 いいんですか。

目黒 二つ、頼みがある。

足立 二つ？

目黒 一つは、このことを副館長や館長に言わないこと。

足立 そりゃもちろん。

目黒 もう一つは。

足立 ええ。

目黒 彼女の前では、僕を「館長」と呼んでください。

足立 え？。

目黒 お願い。

足立 彼女さんに自分は館長だと言ってらるんですか。それまづくないですか。この場はいいですよ。で

もいずれ、ばれますよ。

目黒 この年で館長でも副館長でもないって、けっこう言いづらいんだよ。

足立 まずいですよ。

目黒 お願い、助けて。

足立 分かりました。きょうだけですよ。

目黒 ありがとうございます。助かる。

手塚登場。

手塚 言うの忘れてた。

目黒 なんですか。

手塚 ぬいぐるみ、1匹帰宅させて。

目黒 え？なんで？

手塚 電話があったのよ。参加者のお母さんから。クマのぬいぐるみを図書館にお泊まりさせたのはいいんだけど、やっぱりあれがないと眠れないってお嬢ちゃんが言ってるんだって。2人で車で取りに来るから、渡してあげてくれる。

目黒 そうですか。

手塚 クマの名前はね、ええと（メモを見る）ラルー。お願いね。

目黒 分かりました。

手塚、去る。

目黒 ラルー！

足立 どうしたんです？

目黒 （リストを見る）そんなのない！

足立 え？

目黒 紛失だ！

足立 え？そんな、それがないと眠れないって言ってましたよね。

目黒 そこまで気に入っているぬいぐるみをなくしたりしたら。

足立 その子、二度と図書館に来ませんよ。

目黒 どうしよう。これ？

足立 それ、ジミー。

目黒 これ？

足立 それ、パピー。

目黒 これ？（へビのぬいぐるみを手にとる）

足立 明らかにクマではありません。

目黒 どうしよう。館長にばれたらえらいことだぞ。どうする、どうする。

足立 あ、すごいおろおろしてる。

目黒 探すの手伝って。

首藤、登場。

首藤 どうする。どうする。どうしたらいいのかしら。目黒さん助けて。（足立を見て）あれ。

足立 あ、私、きょうからここで働くことになった司書の足立です。

首藤 あ、よろしくね。ビブリオバトルクラブ代表の首藤です。

目黒 あ、首藤さん、ご苦労様です。

足立 2階の会議室は鍵が開いてるので自由にお使いくさいます。

首藤 ありがとう。目黒さん、それが大変なのよ。

目黒 どうしました？

首藤 響堂、つぶれちゃったの。

目黒 響堂って、耳塚さんところの店ですか。

首藤 今CDって売れないんだって。前から危ないって言われてたんだけど、ついに。耳塚さん、ものすごい落ち込んだじゃって。

目黒 店が生き甲斐ですからね。あの人。

首藤 さっき商店街通ってきたから、ついでにのぞいたらさ、もうなんていうの、自殺寸前って感じよ。どうしよう。

目黒 じゃ、きょうの集まりは中止ですね。

首藤 それがさ、やるって。店にいたら本当に死んじゃいそうだから、こういうときは本好きの仲間という方がましだ、気がまぎれるんじゃないかっていうの。どうしよう。

足立 ま、確かに、そういう時は一人でいない方がいいですよ。

首藤 いつとき、忘れた方がね。そうね。よし。とにかく、きょうは、店とか、つぶれるとか、閉めるとか、人手に渡るとか、そういう言葉は禁止ね。毛利さんももうすぐ来るから、打ち合わせとこう。

目黒 店とか、閉めるとか、つぶれるとか、人手に渡るとか、禁止ですね。

首藤 あと駐車場。

足立 駐車場？

首藤 CDショップのまま人手に渡るんならまだあきらめがつくわよ。あの店、つぶして、駐車場になるんだって。

目黒 分かりました。協力します。店とか、閉めるとか、つぶれるとか、人手に渡るとか、駐車場とかです。すね。

首藤 お願い。あ。耳塚さんが先に。

耳塚、登場。変に陽気。

耳塚 やあ、きょうは天気がよくて、気持ちのいい月夜だね。きょうも楽しいビブリオバトルの始まりだ。おや、そのお嬢さんは？

足立 初めまして。あの、きょうからここでお世話になってます、司書の足立です。

耳塚 足立さん、いろいろお世話になります。ビブリオバトルクラブはまだ3人だけど、ここから増えていって、きっと、大勢が毎日ここでバトルすることになると思うんだな。ビブリオバトル、これから伸びる分野だよ。見たことありますか。

足立 話には聞いてますが、見たことは。

耳塚 一度見るといいです。本を紹介するスピーチを競うのは、やっても面白いし、見ても面白いですよ。知らない本に出会う楽しみもあるし、この人こんな本を好きなんだ、って人についての発見もある。シンプルなゲームですけど、けっこう奥が深くてね、いいですよ。

足立 一度、見せていただければ。

耳塚 ぜひ、見てください。会議室は空いているかな。

足立 空いています。どうぞ。

手塚登場。

手塚 通用門を閉めるのが一番いいんじゃないかと思うのよ。7時になったら閉める。入れないようにする、これしかないな。

目黒 副館長、だめです。

手塚、ひきつる。

手塚 だめなことはないわよ。いたずら防止には、侵入ルートをつぶすのが一番だわ。入ってくる道をつぶしてしまえば、日時計に近づくのはそれだけ難しくなるでしょ。

手塚、さらにひきつる。

目黒 図書館前の日時計へのいたずら防止の話なんですよ。手塚さんの店の話じゃないんです。

足立 目黒さん、だめです。

手塚、よろめく。館長登場。

館長 駐車場、駐車場、駐車場、駐車場（地図を広げる）。

目黒 館長。

館長 駐車場が離れたところにあるのよね。中央公民館ってき。あそこ、すごく車入れにくくて。駐車場不足っていやね。

目黒 館長、だめです。

館長 だめかな、駐車場空いてないかな。

目黒 いや、そうじゃなくて。

毛利登場。

毛利 こんにちは。

首藤 毛利さん。

毛利 あ、耳塚さん、響堂つぶれるってうわさになってるけど、どういうこと？店閉めるとか、人手に渡るとか、駐車場になるとか聞いたけど、うそよね。うそでしょ。

耳塚、座り込む。

毛利 (全員の視線を感じて) 何？

暗転。

宇宙船に光が入る。

ヒジカタ スペースコロニー本部、スペースコロニー本部、こちらグランドマザーシップ。原因不明の爆発で、われわれは脱出不可能になった。繰り返す。われわれは脱出不可能になった。

ハナダ まったくついてないわ。

ヒジカタ 応答ありがとう。地球の大気圏突入まであと36時間、それまでにグランドマザーシップの操縦機能を回復して、スペースコロニー本部まで帰還しないと、私たちの生存は不可能です。

ハナダ 地球に突っ込んでも、着陸できないのよ。この宇宙船、宇宙空間を行ったり来たりするために作られたんだから。地球に突っ込んだら、地上で爆発するだけよ。

ヒジカタ スペースコロニー本部、操縦機能を回復する方法を至急、検討してほしい。

ユリア、宇宙服で登場。脱いでソンプレロをかぶり、ため息をつく。

ユリア だめだわ。修復できない。

ヒジカタ ごくろうさん。「奇跡のメキシコ人メカニック」でも直せないなら、仕方ないわ。

ハナダ 少し休んで。なんだって地球に向かっているのよ、この船。着陸機能ないんだから、そんなプログラム入ってないはずでしょう。

レディ 帰巢本能。

ハナダ 何？

レディ 伝書鳩です。生まれた場所に帰ろうとする。鳩は、そういう本能を持っています。この宇宙船が、作られたのは、地球でしょう。

ユリア このロボット、さっきの爆発で故障したんじゃない？

ヒジカタ レディ、宇宙船は鳩じゃないの。

レディ 分かりました。

ヒジカタ スペースコロニー本部、もう一度確認するわ。グラントマザーシップが地球に突入したら、私たちは助からない。それだけじゃない。旧式の宇宙船だから、燃料はプルトニウムなのよ。

ハナダ ナガサキ型の原爆と同じよ。地球に衝突したら半径100^{キロ}圈内、100年間、誰も住めないわよ。

レディ 酸素100%、気圧100%、湿度100%、生命維持機能、120%に回復しました。

ヒジカタ 宇宙船としては完全に大丈夫なわけね。

ユリア 操縦できないだけね。

ヒジカタ (通信機に) 爆破しようとしたら、勝手に一部が爆発して私たちの脱出ルートをつさいじゃったのよ。どういうプログラムミスなのよ。

レディ 生存本能。

ハナダ は？

レディ 全ての生き物には備えられています。ホオジロザメの親は子どもに、狩りなど教えません。

ユリア やっぱ壊れてる。

ヒジカタ レディ、宇宙船は生き物じゃないのよ。

レディ 分かりました。

ヒジカタ スペースコロニー本部、スペースコロニー本部、どう？メインコンピューターにアクセスする方法は？。え？一つだけある？

ハナダ まさか。なんだってするよ。

ヒジカタ 第2ロッカーに旧式のパソコン？ちょっと待って。あった、うわ、懐かしい機種だね。

ユリア 博物館行かないと見られないわ。

ヒジカタ これがハギワラ博士のパソコンなの？

ハナダ ハギワラ博士？伝説の人物だね。宇宙船を100台以上設計して、一つとして失敗しなかったのよね。

レディ この船もハギワラ博士の設計です。

ユリア まさか、最初の失敗例か。

ヒジカタ このパソコンをメインコンピュータにつなげば、博士個人のソフトから、操縦回路を動かすことが出来る？つまり、宇宙船も、作った人の言うことは聞くわけね？

レディ 犬には飼い主の言うことを聞き分ける本能が

ユリア 少し黙ってて。

ヒジカタ パソコン立ち上がったけど。

ハナダ どう？

ヒジカタ パスワード？

ユリア 当時はそういう時代だね。個人情報こそやって保護したのよ。指紋認証や、網膜認証はまだ一般的じゃなかった。

ヒジカタ パスワードを知る方法はないの？ハギワラ博士は、もうとっくに死んでるわよね。え？パスワードのヒント？ここを押せばいいのね。

ハナダ は？

宇宙飛行士たち 図書館の思い出？

レディ 博士が生前、どんな図書館に出入りしていたか、どんな本を読んでいたか、その図書館でどんな出来事があったか、データを取り寄せます。

ハナダ 頼むわよ。

ユリア あんたが決定的に故障してないことを祈るわ。

3人、去り、ビブリオバトルクラブの3人が入ってくる。耳塚、沈み込んでいる。首藤と毛利、どうしたらいいか分からない様子。

毛利 お店のこと、気の毒だったわ。でもいつまでもそうやってても仕方ないじゃない。あれでしょ、駐車場になることでお金は入るんですよ。

首藤 毛利さん。

毛利 元氣出そうよ。命まで取られたわけじゃなし。

首藤 毛利さん。

毛利 あたし、なんか変なこと言った？

首藤 簡単に言わないの。あなた、ちよつと軽く考え過ぎよ。仕事、したことないでしょ。

毛利 ごめんなさい。

首藤 仕事を失うって、大変なことなのよ。わかんない人が簡単に言わないで。

毛利 ごめんなさい。

首藤 ごめん。言い過ぎた。

毛利 そんなことない。仕事してないもん。

首藤 でもおとうさんの介護もしてるんだものね。大変だったわね。ごめん。
毛利 ううん。

3人、黙る。

毛利 (会議室の壁にかかっている絵を見つけ) 絵が替わってる。

首藤 前回から替わってたよ。

毛利 そうだった？気づかなかった。今度は満月の絵なんだ。だれが描いてるのかな。

首藤 知らないの。副館長の手塚さん。

毛利 すごい。多才ねえ、彼女油絵も描くんだ。小説書くのは知ってたけど。

首藤 多才は多才だけど、小説家でも画家でもないのよね。彼女。小さな図書館の副館長。

毛利 意地悪ね。小説は面白かったよ。SFなの。

首藤 SFなんだ。

毛利 女性ばかりで動かしている宇宙船が、操縦不能に陥る話なの。面白かったわよ。

首藤 怖いじゃない。あたし宇宙ものって嫌い。

耳塚 (唐突に指さして) 油絵じゃない。

毛利 違うの？アクリル画？

耳塚 クレヨン・スクラッチ。

首藤 何それ。

耳塚 まずクレヨンを画用紙にいったいに塗る。その上をアクリル絵の具で丁寧な覆うように塗る。そし

て描きたいものを、爪楊枝とか釘で、ひっかくようにして描くんだ。そうすると、アクリル絵の具がはがれて、クレヨンで描いた色が鮮やかに表面に現れる。

毛利 相変わらず、何でも知ってるわね。

耳塚 こんなこと、知っててもな。

首藤 ビブリオバトルの練習をしましょう。そのために集まったんだから。耳塚さんも、本は用意してきたんでしょ。

耳塚 分かった。仕事のことには忘れるよ。そのために、あえて全然関係ない本を持って来た。

首藤 よし。やりましょう。ビブリオバトル大会は、もう1カ月後なんだからね。本も絞り込んで、スピーチを磨きにかかる時期よ。

毛利 了解。

耳塚 じゃあ、最初にさせてくれ。

首藤 もちろん。(カウントダウンタイマーの設定をする)。本番に合わせて、時間は5分。注意事項としては、耳塚さんは、本のあらすじをだらだらしゃべる癖があるから、なぜその本を紹介したいか、人に読んでほしいか、をちゃんと分かりやすく話すこと。そこがないと、なかなか聞いている人に支持してもらえないからね。

耳塚 分かった。

首藤 じゃあ、お願い。スタート。

耳塚 この本を、紹介したいと思います。仕事と関係ない本だよ。樋口広芳 「渡り鳥の衛星追跡」。

毛利 科学もの。

耳塚 NHK出版が出していて、日本を代表する鳥類学者が書いているんだけど、固い学術書じゃなくて、

すごく読みやすく、面白い本です。渡り鳥に発信器を付けて、渡りをするルートや衛星で追跡していくんだけど、その壮大な旅を追っていく過程がまず面白い。鳥たちが、一様でなくて、それぞれ個性的なコースを通して、でもとてつもない距離を飛んでいく、その様子を記録していくんですね。鳥ってこんな風に渡りをするんだ、という驚きとともに、今の技術を使えば、こんなことが分かるんだ、という驚きがあります。鳥たちの渡りの実態が調査に基づいてレポートされている面白さがメインですが、さらに面白いのは、それを調査する研究者たちの苦労話の方ですね。これが実に興味深い。例えばツルの渡るルートを知るために発信器をつけないといけない。ロシアの学者たちは広大な湿原の真ん中にあるツルをつかまえるためにどうすると思います。ヘリコプターで近づいて、飛び降りて抱きつくんです。で、離れたところに止めたヘリコプターまでえっちらおっちら運んでいく。このくだりが圧巻です。笑えるのは筆者は日本人なんです。「危険なので日本人はやらせてもらえない」って嘆いてる。やりたいのか、こんなこと。それでいて、読者が一番知りたいナゾは、なぜ鳥たちはこんなに苦労して長い距離を飛ぶ、渡りをするのか、ということですが、この本はそれにはほとんど答えてくれません。私が好きなのは、むしろそこですね。鳥たちの飛行ルートという、別に知ったからといって何の役に立つわけでもないことを知るために、学者たちが時間と体力と知恵を使って、挑み続ける。そのことに感動を覚えるんです。いいじゃないですか。役に立たないことに情熱を傾ける人がいてもいいじゃないですか。役に立つことばかりじゃつまらないでしょう。人生には必要ですよ。役に立たないことが音楽とか、CDとか、CDショップが……。

首藤 音楽から離れて。

耳塚 なぜ、商店街のCDショップに行って、聞きたい音楽を選ぶという、その時間さえ惜しむんだらう。好きなCDを手元に置いて、好きなときに聞くといい、そのお金さえ使わないんだらう。そんなに人

は忙しく、お金がないのか。ネットで物を買うってのは、そんなに楽しいのか。そんなに私たちの社会は貧しいんだろうか。役に立つかどうか分からないことのために、何千^キも飛ぶ鳥たちの方が、ずっと、豊かに思えてくるよ。なんてつまらない、なんて息の詰まる、ひどい世の中なんだろう。

間。

耳塚 ごめん。

首藤 よし、次はあたしね。

首藤、本を出す。

毛利 それじゃ……

首藤 あえて。

耳塚 えっ。

首藤 私が今回紹介するのは、アイルランドの小説家、ロディ・ドイルの小説「おれたち、ザ・コミットメント」です。これは音楽についての小説です。最初から最後まで音楽しか出てきません。アイルランドの貧しい若者たちが音楽に生き甲斐を見つけ、みんな「ザ・コミットメント」というバンドをつくり、活動し、解散する、というそれだけの話です。この作品が魅力的なのは、ロック音楽に情熱を傾ける若者の姿が等身大に描かれている。その部分ですね。めちやくちや歌うまいのに、人格最低で、見た目もあんまりなボーカリストとか、出てくる人物も、あ、いるいる、って感じで楽しいで

す。私がこの本が好きなのは、かつての私がいるからです。高校生の頃とか、本当に音楽のことしか考えてませんでした。高校が終わると、一目散にレコード屋さん。響堂ってお店です。カーペンターズがいて、イーグルスがいて、ビートルズがいて。彼らが店で待ってた。今みたいにヘッドホンで聴くスタイルじゃなくて、店長さんが頼むと曲かけてくれるの。

額田 うちの親父だ。

首藤 みんなで順番に頼んでかけてもらった。お父さんがお勧めのレコードを持って来て、これ聞いてごらん、っていうこともあったわ。家に帰ると、あのころ買ったレコードがまだある。プレーヤーはないのに、レコード捨てられないの。人生のいろんな時に、苦しいことがあって、もうだめだと思うこともあって、でもそういう時、聞こえるの。音楽が。私を励ますように。おかげで、なんとかやってこられた。そういう音楽と出会ったのは、響堂だった。私だけじゃなく、たくさんの人がそうだわ。響堂で、音楽と出会い、支えられ、このまちで生きてきた。なくなってしまうとしても、そのことは消えない。人々の心から消えたりはしない。そういう場所。あなたは、誇りに思っている。あなたたちはそういう場所を守ってきた。顔を上げて、そのことを誇りにして、生きていけばいいの。落ち込むことなんかない。素晴らしいことをしてきたんだから。（本を置き、いすに座る）

額田 そんな風に思ってくれてたんだ。知らなかった。長いつきあいなのに。

首藤 クレヨン・スクラッチ。

額田 え？

首藤 表面をひっかくと、別の色が現れるの。

手塚、足立が飛び込んでくる。

手塚 お取り込み中のところすみません、こちらにクマのぬいぐるみがお邪魔していませんか。名前前はラルー。

首藤 ないわよ。

毛利 ないみたい。どうしたの。

手塚 紛失です。下で預かったんですが……。

首藤 物がなくなるってイヤね。

毛利 うちなんかしよっちゅうよ。ま、原因は分かってるんだけどね。

首藤 お母様でしょ。

毛利 そう、最近変なのよ。意味の分からないことをしよっちゅうぶつぶつ。次々に物がなくなるのは、きつとどこかに持ち出しているんだわ。

首藤 何がなくなったって言ってたっけ。

手塚 じゃ、もし見かけたって話があれば声をかけてください (退出しようとする)

毛利 ささいなものなのよ。風呂敷とか、黒いバスタオルとか、毛布とか。

足立 (急停止して) 副館長!

手塚 何?

足立 (毛利に) もう1度言ってみてもらえます。お宅からなくなったもの。

毛利 え、風呂敷でしょ。黒いバスタオル、毛布。

足立 それにシルクハットも。

毛利 なんて知ってるの?そう、主人が手品の会で使ってる黒いシルクハットも。

足立 副館長。

手塚 偶然ねえ。

足立 偶然じゃないでしょう。

手塚 どういうこと？毛利さんとこのおばあちゃんが日時計にいたずらしている犯人かもしれないって言うの？

足立 そうです。

毛利 きょうは、工事現場で使うくい打ち用のハンマーまでなくなったのよ。

首藤 お母さん、大丈夫？

毛利 変なのよ。

首藤 それで人に乱暴でもしたら……。

毛利 それはまあ大丈夫だわ。あんなおばあさんがハンマーで襲ってきたとしても、だれが殴れるもんですか。小学生でもひよいつてよけられるわよ。

足立 よけられない、ものだったら。

首藤 もの？

足立 例えば石でできていたら。

手塚 どういうこと？

足立 おばあちゃんは日時計を見たくないんですよ。なぜか知らないけど。だからものをかぶせてるんですよ。毛布とかバスタオルとか。

首藤 シルクハットとか。

足立 そうです。

手塚 ハンマーは、バスタオルとか風呂敷と違って、日時計にかぶせられないから安心よ。
足立 かぶせようとしているんでしょうか。ハンマーですよ。

手塚 だから安心……。あー！

足立 安心できません。

手塚 日時計へ！

足立 間に合うといいけど。

毛利 私も！

首藤 ちよっと待って！

全員、バタバタと走り去る、すれ違いに宇宙飛行士たち登場。

ユリア まったく、パスワードを生年月日とか、親の名前とか、分かりやすいものにしてくれればよかったのよ。ペットの名前とかね。

レディ そういうものなら、記録に残っています。図書館の思い出は記録に残りません。

ヒジカタ ハギワラ博士は日本人だったよね？

レディ ロシア人とのハーフで、モスクワ生まれです。5歳の時に日本に移り住んでいます。

ヒジカタ 时期的には、日本の図書館だね。

ハナダ 当時はペーパーブック・ライブラリーか。

レディ 電子書籍がまだ普及していない時代です。

ユリア ネット上のリストから選んだ電子書籍を電子メールで送ってくる今のシステムはまだ普及してい

ない。紙の本を、司書と呼ばれる人たちが、カウンター越しに手渡していた。

ハナダ 効率悪いな。

ユリア 私が子どものころ、メキシコにはまだ残っていたよ。

ヒジカタ 日本では21世紀になくなったらしい。

ユリア 私には11人兄貴や姉貴がいてね。けっしてお金のある家じゃなかったから、時間ができるといってもペーパーブック・ライブラリーに。

ヒジカタ そうだったんだ。

ユリア 古い建物で、中が暗くて、裏は墓地だったから、みんなお化けが出るってうわさしてた。でもあたしは怖くなかったんだ。

ハナダ お化けなんかいないから？

ユリア 逆だよ。お化けに会いたかったんだ。あたしはかわいくない末っ子だった。なんでもできた。成績は学校で一番、絵を描いても、作文を書いてもコンクールで入選した。突然変異だよ。末っ子ってさ、出来が悪いくらいの方がかわいいんだ。兄弟には嫌われ、友達にも嫌なやつだって思われてた。いつも一人だった。いつもここにいたくない、どこか遠くに行きたいと思ってた。

ハナダ 分かるよ。あたしもそう思ってたころあったもん。

ユリア 図書館にお化けが出るって聞いて、あたしが感じたのは恐怖や嫌悪感じゃない。希望だ。お化けとなら仲良くなれると、本気でそう思ったんだ。本を手に取りながら、私は空想してた。本一冊ごとに、小さなお化けがいて、ページの間にあたしを待っていると。あたしは本をひらくたびに話しかけたんだ。オーラ、アミーゴ（こんにちは、ともだち）。あたしと友達になってくれる？すべての小さなお化けはいつも返事してくれた。

応える声が、こだまのようにあちこちから聞こえる。

声 「シ」（はい）。

ユリア 書棚の間を歩き回った。古いアメリカのSF小説を読むたびに、お化けたちが友達になってくれた。あたしにとっては夢の時間だった。そして、ある日、図書館のスタッフが話しかけてきた。オーラ、ユリア。何か悪いことでもしたんだろうか。おびえるあたしに彼は言った。宇宙が好きなら、こっちに来て読むといいよ。SF小説もいいけど、そろそろノンフィクションも読むころだ。そうじゃないか。薦めてくれたのはアメリカの初期の宇宙飛行士の姿を描いたトム・ウルフのノンフィクション「ザ・ライト・スタッフ」。

ハナダ 読んだよ。電子書籍で。

ヒジカタ 私も読んだ。電子書籍で。

ユリア あたしはペーパーブックで読んだ。ぼろぼろだった。落書きもあるような古い本だ。宇宙飛行士の悩みが、勇気が、喜びが、絶望が、書かれている。手が震えた。これなんだ。あたしが行こうとしている世界は。あたしが見たいのは、学校でも、街でも、砂漠でも、タコスの店でもない。

ハナダ 地球だ。

ユリア （うなずき）そしてあたしは気がついた。この本が、他の本と手触りが違うことに。つまり、お化けがいないんだ。どのページにもいない。あたしは心の中で言った。どこにいったの。アミーゴ、どこなの。

ヒジカタ いなくなったんだ。

ハナダ あんたが大人になったから。

ユリア 私も、それに気づいた。そのとたん、図書館中の本から、私にしか聞こえない声が一斉に聞こえてきた。別れを告げる声だ。

声 アディオス、アディオス、アディオス、アミーゴ、アミーゴ、アミーゴ

ユリア それから私が読む本には、一回もお化けが出ない。電子書籍になって、なおさら、出ない。

間。レデイが「ピー」と音を立てる。

レデイ 当時、博士が借り出した書籍のリストを閲覧する許可が出ました。特別に許可してもらえたよう
です。

ヒジカタ パソコンを音声認識モードにして順番に読み上げて。

レデイ 了解（児童書の名前を順に読み上げる）

音楽。

3人の背後に、ハンマーを振り回すちようが現れる。取り押さえようとする手塚、耳塚、足立、目黒、毛利も。ちよう、ハンマーを巧みに使い、なかなか強豪。耳塚は簡単に吹っ飛ばし、手塚や足立も取

り押さえられない。目黒が両手にぬいぐるみを持って迫るが、やはり倒される。突然、傘男が現れ、なんとかしようとするが、頭を直撃されてその場に倒れる。ちよう、走り去る。全員、傘男の周りに集まり「だれ」「だれ」と言葉を交わす。

レディ 以上で、すべてです。

ヒジカタ 無理か。

ハナダ 覚悟しないといけないようですね。

ヒジカタ 懐かしい本の名前がたくさんあった。

ハナダ そうだね。

ヒジカタ ハギワラ博士は、これらの本をパソコンでなく、ペーパーブックで読んだんだね。

ハナダ 当時はそれしかないからね。子どものよだれやら鼻水やらで、衛生状態は悪かっただろうね。

ヒジカタ だが、それを手で持って、読むことができた。気に入った本は抱きしめることもできただろう。

ハナダ そうだね。

ヒジカタ 楽しい。

ユリア 私は、楽しかった。

ヒジカタ もし、もしだよ。無事に帰れたら、ペーパーブック・ライブラリーを作ろうか。

ハナダ 無理ね。スペースコロニーには、ペーパーブックがほとんどないよ。

ヒジカタ 地球に探しに行くのよ。どこかに残っているはずよ。紙の本を集めて、手に取って読める図書館。みんなが集まり、本について話し合いながら、書棚の間を歩き回れるような場所。そういうのを作ろう。

ユリア いいね。

レディ 私もそこに行きたいです。紙の本を借りて、読みたい。

ヒジカタとハナダ、笑う。

レディ 笑いますか。

ユリア ロボットが読書？おまえ、絶対故障してるよ。

レディ おかしいですか。

ヒジカタ おかしくないさ。一緒に作ろう。助かったらね。

暗転

照明が入ると、目黒、足立、耳塚、首藤が傘男を囲んでいる。

傘男 どうもすみません。あのおばあちゃん、あんなに強いと思わなかった。

目黒 それはいいとして、なんで図書館に。

傘男 (足立に) おれが誰か、みんなに言ったの？おれがのびてる間に。

足立 私の元夫だってことだけ。

傘男 それじゃ、おれがストーカーみたいじゃない。

首藤 ストーカーじゃないの。

足立 ストーカーです。

傘男 違うよ。

足立 復縁しないって言うてるのに、しつこく復縁を求めて、再就職先にまで押しかけてきてるわけでしょ。

耳塚 ストーカーだ。

目黒 ストーカーだ。

首藤 ストーカーだ。

傘男 そんなハモってまで言わないでくださいよ。愛情がなくなったわけじゃないんです。

足立 なくなってます。

耳塚 なくなってるって。

目黒 なくなってるって。

首藤 なくなってるって。

傘男 だからハモってまで言わないでください。私の浮気とか暴力が原因の離婚じゃないんです。

首藤 本当？

足立 それは本当です。この人が変なものの発明にお金をかけすぎて。

傘男 変なものってなんだよ。

首藤 体に巻き付けてるのがそれ？

傘男 これは違うんです。(傘を開いてみせる)。手で持たなくても傘がさせる、傘ホルダー。

目黒 すごい。

傘男 でも私の前に既に発明者がいて、私特許取れませんでした。

足立 いつもそんなのじゃない。役に立ちそうなものは全部、先に特許持ってる人がいる。あとは犬眠らせ

機とか、猫眠らせ機とか、猿眠らせ機とか、変なのばかり。

傘男 変なのって言うな。犬とか猫が夜騒いで困っている人多いんだよ。金になるよ、これは。

目黒 仲良くしましょう。

傘男 ありがとう。

首藤 なに寝返ってるのよ。

目黒 いやお金持ちの友達はほしいな、とって。

首藤 とにかく、閉館中の図書館に勝手に入ってきたんだから、警察につかまえてもらいましょう。耳塚さん電話して。

耳塚 110番に？

首藤 他にどんな警察があるのよ。

傘男、逃げる。

耳塚 逃げたけど。追いかける？

足立 いいです。もうほっときましょう。それより、目黒さん、クマのラルーを見つけないと。

目黒 そうだった。

耳塚 日時計は？

目黒 そっちは副館長が毛利さんのおばあさんを説得しています。なんとか今晚中に隠し場所を白状してもらって、元に戻しとくって。僕たちははクマを。

足立 分かりました。急ぎましょう。

暗転

毛利、ちよう、手塚が2階会議室に登場、義母は座っている。

毛利 おかあさん、私、何かしましたか。おかあさんを困らせるようなことはしてないでしょ。なんで家から物を持ち出して、日時計にかぶせたり、日時計を壊して、どこかに隠したり、そんなことをするんですか。これまで一緒に、楽しくやってきたじゃないですか。私たちを困らせて、楽しいですか。いったい、どうして。

ちよう あんたとは関係ない。

毛利 じゃ、なんなんですか。

ちよう あんたに不満はない。これ以上、話すつもりもない。

手塚 家庭の問題ではないみたいですね。だとすれば、図書館と毛利さんのおばあちゃんの問題だわ。毛利さんは帰って。私が話します。

毛利 連れて帰ります。

ちよう 1人で帰れるよ。

手塚 私が送っていくわ。いいから。

毛利 (退場、しかけて) 副館長、小説、読んだよ。面白かった。

手塚 ありがとう。みんな面白いって言ってくれなくて。

毛利 宇宙飛行士に関西人、出すといいよ。

手塚　　なんで？

毛利　　その方が明るくなると思う。だまされたと思って、やってみて分かった。

毛利退場。間

ちよう

いい嫁だね。

手塚　　そうでしょうね。

間。

手塚　　日時計をどこに隠したのかさえ、言ってもらったらいんです。ことを荒立てるつもりなんか、ないわ。

ちよう　　そうかい。

手塚　　なんであんなことを。

ちよう　　あたしにも分からない。

手塚　　どういうことです。

ちよう　　いつも散歩で、この道を通るんだ。あれがだんだん、いやな感じになってきてさ。

手塚　　あれって日時計ですか？

ちよう　　あたしを削っていくんだよ。少しずつ少しずつ、あれに削られて、あたしは小さくなって

いく。小さくなって、みすぼらしくなって、なぜだろうね、建ってるだけなのに、何も
ないはずなのに、あれがあたしをどんどん削っていく。見なければいいだろう。そう思っ
た。でも見ちまうんだ。通るたびに。そしてそのたびに、あれがあたしを刻む。

手塚

それは……

ちよう

あたしだけじゃない。あたしの旦那、知ってたか。

手塚

ご病気なんですよ。

ちよう

あれはあたしだけでなくて、寝たきりの、あの男も削り始めた。あの男がだんだん小さくなっ
ていく、みすぼらしくなっていく。バスケットボールの選手だったんだよ。それなのにね。

手塚

それは日時計と関係ありません。

ちよう

私の世界はほとんど雨にぬれて、しょぼしょぼになり、狭くなり、だめなものになっていく。
あれが、あそこになればいい。だから見えなくした。あんなもの。だれも必要としてない。
だれも見なくていいんだ。あたしを削るようなものは、なくなってしまえばいいんだ。だから
かぶせた。あんたがはずすから、またかぶせた。それでもはずすから、それなら壊してしまお
うと思った。そういうことだよ。あたしは、変なのかね。

手塚

毛利さん、それは違うの。削られてるのは、あなただけじゃない。私もそう。みんなそうなん
です。削られて、少しずつ、刻まれて、この世界からなくなっていく。私たちは、決まった時
間だけしか、この世界にいられないんです。

ちよう

聞きたくない。

手塚

聞いて。大事なものは、削られてるって、自分で分かるってこと。だからこそ、この世界にいる
時間を大切にするんです。ただ刻まれ、削られるだけの日々を送るんじゃなく、自分の時間を

生きるの。それを考えるために、あれはあるんです。

ちよう

聞きたくないって言うてるだろ。

手塚

聞いてください。見ていやな感じだとしても、必要なんです。いらなんて、そんなことはないんです。削られてることに、自分がもう残っていないときに、それに気づいて、なんで刻まれてることを早く教えてくれないんだって、そんなことを誰も言わないように。図書館もそうなんです。

ちよう

図書館は違うよ。本は違う。あたしを削ったりしない。

手塚

いいえ。同じです。図書館の本がみんな、楽しい本ってわけじゃありません。嫌なことがいっぱい書いてあるでしょう。

ちよう

やめて。

手塚

虐殺、拷問、戦争、災害、病気、貧困、差別、孤独、自殺、児童虐待。

ちよう

やめてよ。

手塚

でもね、毛利さん、必要なんです。知ってなきゃいけないんです。私たちは、この世界に、見たくないもの、知りたくないものが、いっぱいあるってことを、知ってなくちゃいけないんです。その嫌なものが、少しずつ自分に近づいてくる。音も立てずに背中から来る。そのときに、近づいてきたって分かるために。だから必要なんです。図書館も、日時計も。なくしちゃいけないし、見えなくすることは、けっしていいことじゃないんですよ。

ちよう

(間) あんたの考えは分かった。

手塚

日時計は、どこですか。

ちよう

(間) 教えない。

ヒジカタ、ハナダ、ハラ、レデイが登場。全員着席。

ハナダ 自爆システム準備。

レデイ 自爆システム準備。

ヒジカタ こんなことになるとはねえ。

ハナダ 地球にぶつかって広範囲に汚染するより、宇宙で砕け散った方がずっとましでしょう。

ハラ (ユリアと同じ俳優が演じる) しゃあないやんね。宇宙飛行士らしく、宇宙で死ぬんやね。

ヒジカタ まさか死ぬときに関西人と一緒とは思わなかった。

ハラ ええやん。しんどい時には一緒にいるとほっとするキャラやって、言われるねん。こういうときには、ええんちゃうかな。

ハナダ いろいろ一緒に仕事ができ、楽しかったです。船長。

ヒジカタ 最後はこんななっちゃったけど、私も楽しかったよ。

ハナダ 宇宙飛行士になってよかった。

ヒジカタ あたしも。

ハラ あたしも。

レデイ 私も宇宙開発ロボットでよかったです。

4人、笑う。

ハラ 月に接近。

ヒジカタ 了解。いよいよ、カウントダウンだね。

ハナダ 自爆システム、作動。

レディ 自爆システム、作動。

ハナダ 自爆までの時間は？

ヒジカタ 5分に設定して。

ハナダ 爆発5分前。

カウントダウン始まる。

ヒジカタ 自分が死ぬまでの時間が、刻まれてるって変な感じね。

ハナダ みんな、いつかは死ぬんだから、死ぬまでの時間は刻まれてるのよ。私たちには、それが見える
っただけ。

ヒジカタ そうね。

間。ヒジカタ、「蛍の光」を歌う。

ハナダ 日本のスーパーマーケットの閉店のときにかかる曲ね。

ハラ 卒業式で歌った。

ヒジカタ 卒業だから。

3人で歌う。

レディ 地球が近づきました。

ヒジカタ 見納めだね。

ハナダ 最後まで、船長だね。

ヒジカタ え？

ハナダ 最後まで、人間らしくジタバタしたら。

ヒジカタ 船長になると、なかなかそうもいかないんだよ。

ハラ 卒業まで、級長やね。優等生やね。

ハナダ 本音でいきましょう。死ぬ前くらい。

ヒジカタ 「死にたくない」とか

ハナダ 「まだやり残したことがある」。

ヒジカタ 「孫に会いたい」

ハナダ 「助けて、お願い」

音楽

ハナダ 何だ。レディ、何が起きた？

レディ ハギワラ博士のパソコンが作動しています。

ヒジカタ 自爆システム、停止。

レディ 自爆システム、停止。

ハナダ (パソコンを操作して) 操縦システム起動。

レディ (間) 起動できました。

ハラ やったー！

ハナダ 操縦できるよ。助かった。

ヒジカタ 信じられない。

ハナダ パスワード？私なんていったかな。

ヒジカタ 「助けて、お願い」？

ハナダ 図書館の思い出が？

レディ 宇宙船をリターンさせます。

ヒジカタ スペースコロニー本部、スペースコロニー本部、グランドマザーシップの操縦回路回復に成功。

今から、スペースコロニー本部に戻る、繰り返す。グランドマザーシップの操縦回路回復に成功した。

レディ 奇跡です。奇跡ってあるんです。

ハナダ あんた、絶対故障してるよ。直してもらいな。

お互い、祝福しあいながら、去る。すれ違いに毛利とちようが入ってくる。ちよういすに座る。

ちよう まだ帰ってなかったのかい。

毛利 そんな、おかあさんを置いて帰れないわ。

ちよう あたしは、取り調べが終わるまで帰れないからね。

毛利 取り調べなんて。日時計を隠した場所を言えばいいだけよ。

ちよう 言わない。

毛利 おかあさん。

ちよう あたしが頑固なの知ってるだろう。

毛利 でも

ちよう 説得しようとしてもだめだよ。あれは出さない。

毛利 分かった。おかあさん。わたしの本の紹介スピーチを聞いてくれない？

ちよう なんとかバトルか？

毛利 ビブリオバトル。今度大会に出るの。私初めての出場なんで緊張してて。

ちよう なんで今。

毛利 いい？聞いてて。私がきょう紹介する本はトール・ハイエルダール作「コンテイキ号漂流記」です。作者はノルウェーの冒険家で、いかだを使った太平洋横断にチャレンジし、成功しました。6人の男たちが古代のいかだを作って無謀と言われたチャレンジをして、成功する様子をリーダーのハイエルダールが詳しく書いています。私が好きなのは、乗組員たち、これがそれぞれ専門分野を持ったプロばかりなんです。研究者、無線技士、船乗り。みんな自分の世界を持っていて、けっして仲がいいばかりではないけど、助け合いです。よく海に落ちるんだけど、仲間に使われる。好きなのは冷蔵庫のエンジニアが入っていて、彼が、赤道直下の南太平洋の上で雪を作る場面です。いろいろな物を混ぜて、化学変化で雪を作るんですけど、突然ひげが真っ白になる、その場面がと

でも楽しい。専門分野をそういう形で生かすんですね。(間)多くの人が、いかだに乗っていると
思うんです。行き先も分からないかだに。無線はなかなか通じなくて、でも一緒に乗っている仲
間がいて、一緒に戦えれば、その旅はけっして苦しいだけじゃない。そういうことを思わせてくれ
るから、この本は今も世界中で読まれているんだと思います。苦しいときもある。プライドもある。
簡単に人に助けを求めることはできない。でも同じいかだに乗っている仲間はずっといる。助けを
求めることができる。読み終えて、周りを見回す。そういう本だと思うんです。だから私は、この
本が好きです。おかあさん、寝てるの。

毛利、静かに歩み去る。すれ違いに傘男、飛び込んでくる。隠れ場所を探す。ちよう、目を覚ます。

傘男 あ、少し、かくまってくれ。

ちよう あ、さっきは悪かったね。頭、大丈夫かい。

傘男 元々ちよっとおかしいんだ。殴られたぐらいで、ちようどいい。

ちよう あたしもだよ。このごろ頭が変でね。

傘男 それであんなもん振り回していたのか。危ないぞ。

ちよう 悪いね。

傘男 おれはさ、悪いとは思ってねえんだ。

ちよう 何が。

傘男 頭がおかしいことさ。いや、人に迷惑かけっぱなしってのはだめかもしれないよ。でもさ、頭がお
かしいって人に言われるようなやつが、結局、歴史を変えるのさ。エジソンがそうだった。お互い、

頑張ろうぜ。

ちよう うーん。あたしとあんたは違うかもしれない。

傘男 そうか。

ちよう 人に迷惑かけっぱなしってのはだめだと言ったな。

傘男 そうだな。こういうことは言えるかもしれない。おれたち人間には限界ってあるんだよ。

ちよう 限界ね。

傘男 おれは天才なんだが、うまくいかないんだ。人には限界がある。それを認めれば、もっと現実的な仕事をして、うまくやれるのかもしれない。喫茶店のウェイターとかね。いつときやってた。ビヤガーデンでも。それが人にも迷惑をかけず、家族の笑顔に囲まれて、うまくいく道かもしれない。そういうことなんだ。ある種の人間には、自分の限界が分からない。おれはきっと、そうなんだ。いつも心は叫んでる。助けてくれ。おれは人を笑顔にしたいのに、いつも、怒らせている。誰か助けてくれ。お願いだ。答えはない。遠くで雷が鳴る。どうにもならないよ、心の声が言う。そういうことなんだ。

ちよう 人を喜ばせる方法があるよ、

傘男 え？

暗転

足立と目黒がクマ探しをしながら登場。

目黒 ああ、どうしよう、どうしよう。

足立 落ち着いてください。大丈夫ですよ。

目黒 どうしたらいいんだろう。そうだ。いいことを考えたぞ。

足立 どんなアイデアが。

目黒 図書館の照明を落とそう。

足立 え？

目黒 クマを取りに来てもさ、図書館が真っ暗で、だれもいなかったら、あきらめて帰るだろう。

足立 本気で言ってるんですか。

目黒 これしかないよ、一晩くらい、クマなしで過ごせるさ。その間に探して、朝までにはなんとか見つかる。とりあえず照明を落とすんだ。

足立 (怒鳴る) だめです。

目黒 なんで？

足立 絶対にだめです。それがないと眠れないほど。なくしてはいけない、大切なものが。なくなっただです。見つけましょう。明かりを落とさないで。

目黒 分かったよ。

足立 ごめんなさい。変にむきになって。

目黒 いや。そんなことない。でも怖かった。

手塚、傘男、毛利、登場。和やかな雰囲気。

傘男 喜んでもらえてうれしいです。

手塚 素晴らしいわよ。あの頑固な毛利さんの説得に成功するなんて。他の誰にもできないわ。

目黒 副館長、日時計は？

手塚 元に戻しました。この人が、毛利さんから聞き出してくれたの。公園の木のうちの中に隠してあった。

目黒 すごい。

毛利 本当にありがとうございました。私、このままだったらどうしようかと。本当に。すみません。あの、母は連れて帰りますね。

手塚 分かりました。お願いします。あ、毛利さん。

毛利 はい？

手塚 やっぱ関西人は無理だわ。

毛利 そう？

手塚 まだメキシコの方が。

毛利 メキシコ人？天才的なアイデアだわ。

目黒 そう？

毛利、去る。

手塚 (傘男を見て) お礼をしなくちゃね。

傘男 お礼はいいんですが、(足立をさして)、彼女と話をする時間をいただけないでしょうか。

手塚 それは、彼女次第だわ。私の立場では簡単にOKとは言えないわ。

足立 分かりました。仕事があるので、手短にお願いします。

目黒 (傘男に) 暴力はダメだよ。

足立 この人はそういう人ではないんです。

目黒 分かった。クマ探してくる。

手塚 そっちの問題が残ってたわね。

目黒、手塚、去る。

傘男 悪かった。

足立 あなただけが一方的に悪いってことはないわ。

傘男 心を入れ替える。あれから考えたんだ。発明も、でかい夢ばかり追わず、一つ一つ現実的に進めるよ。

足立 あなたらしくないわ。天才なんですよ。

傘男 天才だけどね。君がいないと花開かない天才だって気づいたよ。君が助けてくれないと、一生このままだ。助けてほしい。

足立 私たちは船なんだよね。小さな船。目指す港が違うの。無理に一緒に進もうとしても、うまくいかないわ。

傘男 うまくいくよ。おれはそう思う。

足立 私が船長ですから、私が判断します。一緒には進みません。そう決めتانです。

傘男、悲しそうに出て行く。去り際に、傘が開く。

足立 雨降ってないよ。

傘男 心の中に降ってるんだよ。

傘男、退場。目黒、登場。

目黒 クマの数自体は合ってる。

足立 でもルールはいない。

目黒 何かの間違いかな。

メイ、登場。

目黒 メイ

メイ 美しい場所だな。

目黒 え？

メイ 夜の図書館だ。本たちが昼間に広げた翼を、今はすべてたたんで、息を止めている。静かで、美しい場所だ。

目黒 そうか。

メイ　なぜ私があなただを好きか分かるか。2つあるんだ。図書館長で、正直者だ。2つも美しいところがあある。

目黒　ありがとう。

メイ　仕事、大変そうだな。

目黒　ちよっとトラブルが起きてね。悪いけど、また今度にしてくれるかな。

メイ　分かった。邪魔はしないよ。

足立　私はあちらを探してきます。館長。

目黒　え？ああ、頼むよ。

メイ　（足立に）お邪魔してます。

足立　いえいえ。あの、いつも、館長にはいろいろ指導を受けていまして、お世話になってます。

足立、振り返ると、そこに館長がいるのに気づき、ぎよつとなる。目黒も凍りつく。

館長　会議、あつという間に終わってしまいましたよ。インフルエンザで欠席が多くて。

足立　そうですか。

館長　そちらは順調？

足立　ええ、まあ。

首藤、耳塚が登場。手塚も、やや遅れて登場する。

首藤 館長さん、きょうはどうもありがとうございます。

耳塚 館長さん、これからもがんばります。

館長 店、残念だったわね。

耳塚 まあ、気持ちを切り替えることにしました。仕事がなくなった分、時間ができるので、私、なんかやりますわ。

首藤 なんかって。

耳塚 バンドやろうかと思って。

首藤 バンドやるの？楽器できたっけ。

耳塚 できない。ギターとドラムできるやつ探して、私は歌う。

首藤 館長さん、この人の言うこと、まじめに聞かなくていいです。

耳塚 まじめに言ってるんだよ。

メイ あの人、館長さん？

目黒 ああ。ああ。

メイ あなたも館長さん、彼女も館長さん。館長さん、2人いるのか？（首藤、耳塚は退場）

館長 （メイに気づき）目黒さん、その人は？

メイ 目黒、その人は？

目黒 （メイに向かい、館長をさして）上海から図書館の貸し出し技術を学ぶために留学中で、うちで研修している中国人司書で、カン・チョウさん。

館長、足立、手塚はびっくりして凍る。

メイ そうか。ワンシャンハオ、ダージャオレー（こんばんは、お邪魔しています）、カン・チヨウ。

目黒 中国語、できるの？

メイ もちろん、日本語より得意ね。シージエンジエーマワン、ダージャシンクラー（みなさん遅くまでおつかれさま）

館長、状況を飲み込もうと考え込む。そして事態を理解し、目黒をにらみつける。目黒、おろおろしながらも、ホワイトボードに「おねがい、たすけて」と書き、館長に見せる。館長、ますます、怖い顔になる。

館長（流暢な中国語の発音で）ホワンイン、ニーライ、ウイメンダ、トーシユグアン。ダンシー、ジ

ェール、イージングワンメンラ、チンチューチー（こんばんは、図書館によろこそ。でも閉館時間なので、部外者は外に出てください）

メイ フェイチャンバオキアン、ツアイチエン（申し訳ありません、さようなら）。じゃ、帰るね（目黒に行つて、去る）

凍るような沈黙。

館長（手塚に）あたしも大きな船なんだよ。

手塚 本当ですね。

目黒 ごめんなさい。

足立 目黒さん、目黒さん。

目黒 はい。

足立 きちやった。

目黒 は？

2人、舞台外の少女と向き合う

目黒 君が、クマのぬいぐるみを家に帰してほしいうっていう、ええっと、ハギワラ・エレンちゃんだね。クマはどのクマだったかな。え、これ。

目黒、手に持った白いクマをじっと見つめる。

足立 パピー？

目黒 ラルーじゃなかったの？

足立 ハギワラ・エレンちゃん。あなたのクマは「ラルー」。リストでは「パピー」になっているわ。あなたのママが書いたのよね。これで間違いないの？

館長。歩み寄る。

館長 間違いありません。ハギワラ・エレンちゃん。あなた、モスクワから来たばっかりなのね。目黒さん、ロシア文字です。エレンちゃんのパパ、ロシア文字で書いたのね。

館長、ホワイトボードに「PAPY」と書く。

館長 ロシア文字では、NはH。RはP。YはU

館長、「RARU」と書く。

目黒 ああ。

足立 そうだったんだあ。エレンちゃん。ラルー君、返すね。うん。良かったね。また、本を借りに来てね。

目黒 え？（ホワイトボードを振り返り、「たすけて、おねがい」と書いた自分の文字を見て）この言葉？これはね、図書館に伝わるおまじないの言葉なんだ。困ったときにこれを唱えると、なんとか、うまくいくんだよ。

足立 適切なこと言ってる。

館長 目黒さん、変なことを子どもに教えない。

目黒 どんな本が好きなの。え？宇宙船？副館長の仲間だな。またエレンちゃんが好きそうな絵本、探しておくね。

少女はくまのぬいぐるみを抱いて去っていったようだ。

目黒 (疲れてへたりこみながら) これが、うちの図書館の一日だ。どう、なじめそう？
足立 大変だけど、楽しそうですね。

暗転。音楽。スーツ姿にそろってソンプレロをかぶった宇宙飛行士たちが並ぶ。

ヒジカタ 私たちは3年前、暴走の末、地球に突入して大事故を起こしそうになった宇宙船を無事に宇宙ステーションに帰還させることに成功しました。

ハナダ その時の賞金を、私たちは自分らのためではなく、人類のために役立てたいと思ったのです。
ユリア 地球上に残されたペーパーブックを集めました。コンピューター上でなく、手に取って読める紙の本を。図書館をつくりました。紙の本による図書館の復活は50年ぶりと言うことです。
このメキシコシティーに、復活したのはメキシコ人の誇りです。

ヒジカタ この活動が有名になると世界各地で、紙の本による図書館を作ろうという運動がわき起こりました。うれしいことです。

ハナダ もうすぐ東京に第2復活図書館が。ニューヨークやシドニーやアデイスアベバにも計画が進んでいます。うれしいことです。

ヒジカタ 復活したペーパーブックライブラリーの館長に「奇跡のメキシコ人」が就任してくれたのも、私たちの喜びです。

ユリア ではテープカットを。

宇宙飛行士たち、テープカットする。

ユリア　私たちの誇るロボット図書館員たちが、合唱を披露します。メキシコ音楽で祝いたいところですが、仲間たちのふるさとに敬意を表して、日本の歌を。

ロボット合唱団が歌い始める。宇宙飛行士たちも歌に加わる。

エピソード

合唱の中、

目黒、足立、手塚、館長が姿を見せる。図書館に施錠し、外に出たところ。

目黒　館長、何か国語できるんですか。

館長　5カ国語。

目黒　すげえ。

館長　これからは図書館も国際化の時代だよ。

メイ、姿を現す。

目黒 まだ、いたのか。

メイ 図書館を見ていた。今まで仕事をしていたのか。

目黒 仕事が遅くてな。

メイ それは日本人がよくするやつだ。自慢の反対、なんだったかな。

手塚 謙遜？

メイ そう、謙遜しなくてもいい。きょうはどんな一日だった？

足立 私には長い一日だったけど

目黒 平凡な一日だよ。いつもと同じ、図書館の一日だ。

メイ それも謙遜。

目黒 え？

メイ きょうあなたがたはたくさんの本を、たくさんの人に手渡した。私は見ていた。たくさん、本当にたくさん。きょう手渡した本は、子供を本好きにしたかもしれない。元氣のない人を笑顔にしたかもしれない。人生の迷路にいる人に、行くべき道を教えたかもしれない。未来のビル・ゲイツにビジネスのヒントを与えたかもしれない。たくさん、たくさん。「かもしれない」を、たくさん、たくさんの人に手渡した、美しい一日だ。謙遜しなくてもいい。

手塚 ありがとう。

メイ 私にもいい一日でした。（目黒に）あなたが正直者でも、図書館長でもないことが分かった。

目黒 あ。

メイ でもいい友達をいっぱい持つてる。本や子どもたちをととても大切にしていることも分かった。いい人かもしれないね。

目黒　　そ、そうなんだよ。

メイ　　ではここで、失礼します。(去ろうとして振り返り) 本運びさんたち、きょうも、ありがとうございます。
いました。

館長が、右手を突き上げて応える。メイ、退場。

足立　　大きな月。

手塚　　本当ね。

図書館員たち、去る。

毛利、ちよう登場。

毛利　　かあさん、ないわ。こんな川を舟が下っていくはずないじゃない。見間違いよ。

ちよう　　見えたんだよ。確かに。小さな舟だよ。

毛利　　そんなはずないわよ。帰りましょう。(メイに) ごめんなさい。うちの母、最近ちよつと変なの。

メイ　　私にも見えました。

毛利　　え？

メイ　　小さな舟、月の光の中を静かに下っていきました。子供たちのための本をたくさん積んでいました。

毛利　　本当？

ちよう　へさきには、ラジオが。

合唱団の歌が大きくなる。3人、月に照らされながら、川面を見つめる。

溶暗。

幕。

【参考文献】

- つながる図書館（猪谷千春）ちくま新書
ビブリオバトル　本を知り人を知る書評ゲーム（谷口忠大）文春新書
図書館員への招待（塩見昇編著）教育資料出版会
図書館の電子化と無料原則（津野梅太郎）共同保存図書多摩
図書館がまちを変える（福留強）東京創作出版
渡り鳥の衛星追跡（樋口広芳）NHK出版
おれたち、ザ・コミットメンツ（ロディ・ドイル）集英社
コンチキ号漂流記（トール・ハイエルダール）偕成社
ザ・ライト・スタッフ（トム・ウルフ）中公文庫

カヌー・ラジオ